

解放奴隷とアベオクタの記憶

『物語ナイジェリアの歴史』という新書を書いた時に、コラムで掘り下げるべく十人ほどの経歴を調べたのだが、キリスト教の布教拠点であったアベオクタ町に関わる人が五人もいた。そのうち二人は解放奴隷であり残りの人たちもその関係者であった。彼らの人生の軌跡を簡単に紹介しその意味を少し考えてみたい。

ラゴスの北七十七kmにあるアベオクタは、奴隷貿易で栄える強国に囲まれた弱小国の首都にすぎなかったのだが宣教師の歴史では特筆すべき町となった。イギリスの軍事的支援を得るために十九世紀初頭に奴隷貿易を禁止し宣教師を受け入れたのである。イングラント国教会の白人宣教師たちが初めて町に入ったのは一八四五年であった。

宣教師たちは町の要請に応じて武器と弾薬を供給し防禦方法も教えた。安全を確保したうえで宣教師たちは布教を行なった。シエラレオネの首都フリータウンで奴隷から解放されキリスト教徒となった解放奴隷のなかには、宣教師の受け入れを決めたこの町に移り住む者もいた。

一八四〇年頃、二千kmあまりの道をシエラレオネから歩いてこの町に着いたトーマスという解放奴隷の青年がいた。宣教師に付けられた名前をもつ彼は熱心なクリスチャンであった。この町で家庭をもち何人かの子供を得たが、そのうちの一人が後にナイジェリア初の女性運動家となるフンミラヨ・トーマスであった。徴税反対運動を指揮した彼女は社会主義運動家としても評価され、一九五〇年代にナイジェリア人女性として初めてロシア、東欧諸国、中国を訪問した。中国では毛沢東にも会っている。

彼女は宣教師の息子O・ランソメックティと結婚し、二人の間に生まれた子供の一人が一九七〇年代にアフロミュージックの世界的スターとなったフェラ・クティである。家の中では非キリスト教徒のことを「野蛮人」と呼ぶように嫉られたというフェラであるが、長じて自らの生い立ちを否定するかのようになり西欧文化批判を行い独特のアフリカ中心主義を唱えるようになった。彼にとって西欧主義とキリスト教は、自分の家系を覆(呪)った憂鬱な記憶だったのかもしれない。

このフェラの父方の従兄にあたるのが、アフリカ初のノーベル文学受賞者W・ショインカである。彼は近代化とキリスト教化が進む植民地時代の社会における人々の葛藤を一見悲喜劇風に演じる戯曲を数多く書いた。アフリカ文化を西欧的価値観から見ると強く拒否し、S・A・クローザーの進歩主義的啓蒙主義にも批判的であったが西欧的知性には恃むところがあるようで、トランプ政権が発足するやアメリカの永住権を捨てアベオクタに戻った。自ら解放奴隷であったクローザーは、シエラレオネのフリータウンで英語教育を受け、一八二五年に洗礼を受けてイギリスに渡った。そこで宣教師の資格を得て一八四三年にアベオクタに着任した。ヨルバ人である彼にとってヨルバランドにあるこの町はうってつけの場所であったが、暫くして奥地の未開地に行く命令を言い渡されたこの教区を離れた。その後ニジェール川沿いの未開地で取り組んだ彼の布教活動の成果はめざましく、その功績を称えられ一八六四年にアフリカ人初の司教に任命された。奴隷から解放された直後に触れたキリスト教と西欧文化は、クローザーにとってはまさに血となり肉となっていたのである。

そのクローザーの孫であるH・マコーレイには啓蒙主義を無条件で賛美する気はなかった。彼はイギリスで受けた教育と植民地政府で働いた経験を反植民地運動の組織化に生かした。一九二三年には最初の本格的政党を結成し植民地政府と対峙した。彼こそナイジェリア最初のナショナルリストだと後に言われ、植民地政府にとって最も手ごわい反植民地運動家となった。祖父クローザーは晩年に国教会を抜けたのであるが、その心の奥底に潜む「解放」と「改宗」の苦しみをマコーレイは理解していたのかもしれない。クローザーが司教に任じられてからちょうど百五十年後の二〇一四年六月三十日に、イギリス国教会のカンタベリー大司教が国教内でクローザーに対する人種差別があったことを公式に認め謝罪した。これによりクローザーとマコーレイの魂が癒されたのかどうかかわらないが、少なくとも今を生きている人々に奴隷解放とキリスト教受容の歴史の重さを思い起こさせたことは確かであろう。彼らの人生をたどる中で、人には忘れ得ぬ過去の記憶があり、それが世代をこえても伝わるものだと改めて強く感じさせられたものである。